

流離譚（新潮連載第六、七回 昭和五十一年八、九月号）

第六、七回

流離譚の第六回は、井口村で起こった事件について記載しています。この第六回から単行本「流離譚」発行に当たり大きな改定が見られます。

例えば、

「前に私は本家の平八が死んだ頃から、・・・」の文章が削除され

「前に私は、寺田寅彦も著作のなかに井口村事件に関するものが見当たらないこと、そして、これは寅彦が事件を知らなかったためでなく、話が悲惨過ぎて書くになれなかったのだからといふことを述べた。・・・」に改定されています。

*井口村事件 上士が下士に切られた事件。その結果事件に直接関係ない宇賀喜久馬が切腹させられ兄利正が介錯。兄は後の寺田寅彦の父。

二人の歳は若く伝っていると、流離譚に次の記述がありません。

・寺田家の戸籍によれば利正はこのとき十六歳ではなくて二十五歳なのである。これなら立派に介錯人のつとまる年齢であろう。では、なぜ十九歳を十三歳、二十五歳を十六歳とするやうな誤りを生じたのか。・井口村事件は芝居に仕組まれ、美少年宇賀喜久馬の悲運は子女の紅涙をしぼったといふことだ。・・・

章太郎の祖父又彦の母は利正の姉で、利正とお下とは親しかったようです。又彦が明治二十三年東京に行くとき、名古屋に赴任していた利正に会いに行きますが、利正は熊本鎮台に転任



寺田利正 自画像

S. IMAI
KOCHI.



町本市知高
榮井会

していたので会っていません。次がその時の又彦のメモ記録です。

汽車ニ乗シ大阪出發

全午后六時三十分名古屋着

旅宿名古屋市木挽町

川村方ニ宿 其夜□ガ

湘與午后十二時頃帰宿

就寢床

翌朝早起中ノ町井出正章

氏ヲ訪フ不遇正章氏ハ

名古屋鎮臺會計監警

ニシテ余カ伯父寺田(*利正)氏ト即テタ

役ニシテ格分別想ニ□ニ□ハ

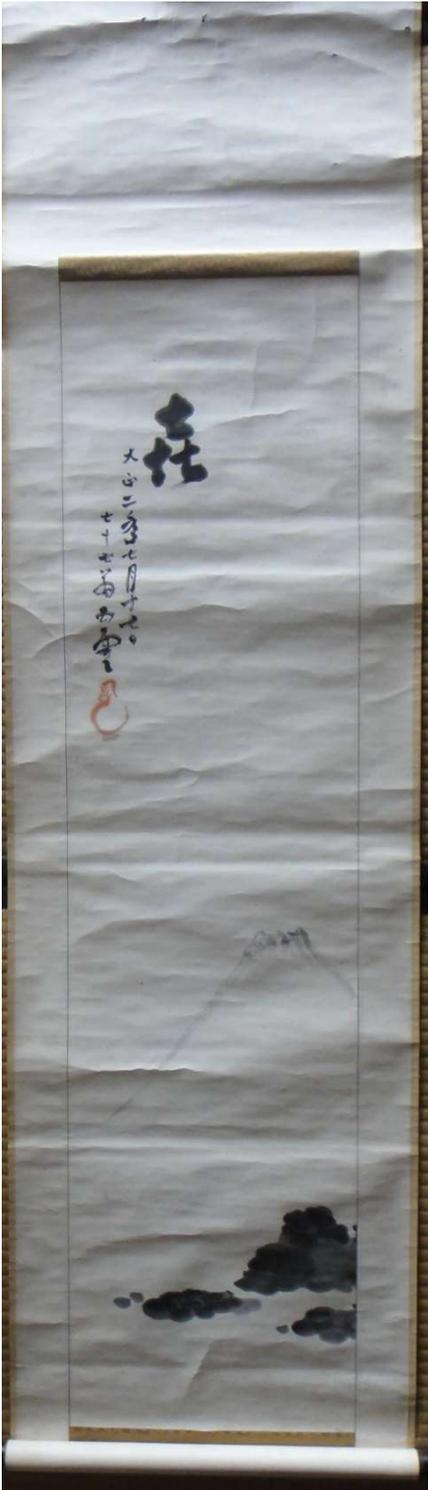
依ンデ□ヲ伯父ニ

従ヒ熊本鎮臺ニ至ル

左軸は喜寿の寺田利正が大正二年七月十七日(七が重なり喜に通じる)に書いて貰うと「幸」があると縁故者に配ったものです。その時
のことを秀彦は日記に次のように書いています。

七月十七日 木曜 曇

本日夜ハ非常ニ蒸セ暑イニた
まらん夕方散歩シニxつたら
公園大下正調高ノ別役の伯母
さんニ会つた今日ハ寿四乃御
老人処七十七方乃七月乃十七
日ニて今日喜の字を書いても
らつたら非常ニ幸奈りとの事
で四方より注文があり早や伊
野辺伯母さんの指図にて一枚



自分のものも書いて下されてゐるも□事あせかもよしと其足で直ぐ寺田へ行き御禮を述へ且つ御馳走ニ□上あつて帰る別役へ□□□□
してもらう事とせり

このような「七並びの日に自分の喜寿を掛けて軸を縁者に配る」ことを思い付く、利正は弟を介錯した悲惨な過去と違った面をあるように思います。

次の金婚式の写真は親類から写真ファイルを貰い受け掲載しています。

寺田寅彦が利正の左後にいます。

自画像写真などを近況報告で送っていましたので、この写真も山北に送られてきたと思います。



寺田利正氏夫妻金婚式記念撮影(明治41年1月)

(伊野部重一郎氏提供)

井口村事件の後、流離譚は薫的神社の記載が続き、そこから山内家城主の移り変わりそして吉田東洋が登場します。長宗我部の菩提寺であった瑞応寺が廃仏毀釈で薫的神社に変わったように流離譚に書かれています。先日、薫的神社に行ったら共存するように瑞応寺は残っていました。

文助の書いた家系圖は当主単位に書かれ、多くの人は没年、妻の実家・没年などを一、三行にまとめていますが、平八正久の項は生没年以外も書かれ二十行を越えています。その部分の家系圖を以下に示します。

文助は曾祖父平八正久の日記を手に入れていましたので、そこに平八正久の父覚兵衛正元の後妻の輿入れ道具及び瑞応寺への寄附などが書かれていたのでそれを写したのでしょうか。

輿入れ道具は他にもあったと思いますが、鏢二枚を取り上げられています。一枚は媒に渡し、もう一枚の鏢は「スカシ舞鶴」で安岡の家へ渡されたとあります。

瑞応寺への寄附について事細かく書いています。瑞応寺は深尾家の菩提寺のようで、輿入れ道具の鏢から、深尾家は長曾我部に仕えたそれなりの家格だったのでしよう。安岡の家も夜須で長曾我部に仕えていました。その後、深尾配下の郷士になっていきますので、深尾家にお世話になっていた可能性はあります。

家系圖によると安岡の家から瑞応寺への寄附が始まったのは享保二十年です。買請けた田を祠堂田とし、吉米七斗五升五合を岡芝と四坊で毎年寄附していたとあります。覚兵衛正元が四坊で独立したのは寄附が始まってから五十年後の明和八年ですので、岡芝（本家）だけで寄附しその後、四坊が参加したのか、覚兵衛正元以前に四坊に誰かが住んでいて、その人が寄附していたのか。瑞応寺への寄附が始まる一年前の享保十九年に覚兵衛正治が亡くなっています。安岡覚兵衛正治の墓及び後妻の墓はともに有岡山にあり、四坊山の女性の古い墓に見られる「x x妻」でなく戒名が刻まれ台座に平八正久母とあります。

何か寄附の開始を解く鍵があるように思います。先妻の墓は岡芝にあり戒名と覚兵衛の名刻まれています。お下では場所は不明ですが、正月に「深尾の神様」にお供えをしていたそうです。瑞応寺への寄附の名残でしょうか。

四年六月遷戸家地并後別宅故不寬延二己巳

二月二日卒行年六拾四歲墓地有岡山有是別

利彌太家祖也後孫十郎代前田亦移住

九兵衛 明和乙酉八月十日卒老龜平家祖

弥九郎 享保十八癸丑二月六日卒後裔禮

女子 早生享保十九甲寅年九月七日行年九歲

正久 安岡平八父ト云ク其父ハ本口家ノ姓
桐原式部其古味何某也

鄉士初代覺兵衛四男初實兄佐五在馬父ト云ク其父ハ本口家ノ姓養食言大

寶曆二年申歲律四德丁丑後七郎兵衛及後

知買精新規鄉士 名出天明元辛丑年十二月

十三日卒享年七拾九歲墓地四坊山有覺兵衛

仰榮信士母八深尾氏公乘八深尾檢通三子而

松下源太左衛門二男助 巫下云人ノ養食子助 巫下亦多

子而素山氏ノ養食子是亦不章守家督慎中ノ底

家系圖 平八正久の項 1 / 2

此家純^レ右葉山家^ノ養子^ト來^レ人^ノ妻後[、]伴^ノ教^ノ成
 媒^ヲ以^テ覺^レ其^ノ衛^ノ之後[、]妻^ト來^レ平八^ノ生^レ仍^レ深^ク尾^ノ家^ノ道^ノ具
 何^レ角^ノ持^テ系^ト由^テ其^ノ中[、]肥^後銚^二枚^一由^テ來^レ書^ノ有^レ
 右^ノ助^ト之^レ兎^ノ兄^中來^レ助^九郎^ト唱^テ肥^後公^ト仕^テ或^レ將^テ助^九郎^ト
此有姓
實之字平八其父姓亦四川
 為^テ對^テ面^ノ而^テ國^ト來^レ時[、]銚^二枚^一在^テ持^テ系^ト右^ノ平八^ノ母
 右^ノ銚^二持^テ來^レ二^枚內^一枚^{後、}伴^ノ教^ノ寺^ト長^ト馬^ト及^レ也^ト也^ト
 由^テ一^枚於^テ今^亦持^テ入^レシ舞^鶴板^亦亦^傳尾^傳之^也
 知^源了^通信^士為^テ言^テ提^テ旆^主來^レ寧^院尾^控之^也
 及^テ後^家房^祠堂^田瑞^應寺^寄附^山北^村本^田六^反
 代^承可^在以^享保^十年^卯月^山北^村四^郎助^分買^得
 於^寺附^於今^古在^寺中^奉奉^之因^是四^坊每^年奉^之
 于^板水^板か^し、^寺在^寺中^一井^瑞應^寺ト^持系^初平八
 平八^上郎^ト唱^後平八^母故^觀妙^讚信^女寶^曆
 三年^癸國^正月^十日^行年^六十^一歲^而卒^之墓^地有^岡山^有

家系圖 平八正久の項 2 / 2